



てきすとぽい杯

VOL

5



<http://text-poi.net/>

目次

[てきすとぼい杯について](#)

[てきすとぼい杯について](#)

[第5回 募集要項](#)

[第5回 審査結果](#)

[入賞作品紹介](#)

《大賞》

[「ここと、pediophobia に関して」](#) [太友 豪](#) 獲得☆ 4.091

《入賞》

[「失われた古代文明 ※グロ注意」](#) [碧](#) 獲得☆ 4.000

[「僕の宝箱」](#) [永坂暖日](#) 獲得☆ 4.000

[「PANDORA BOX」](#) [茶屋](#) 獲得☆ 4.000

〈候補作品〉 ※得票順

〈新・地球論賞〉

[「地球は丸くなかった！」](#) [工藤伸一@ワサラー団](#) 獲得☆ 3.900

[「10年の期待」](#) [住谷 ねこ](#) 獲得☆ 3.818

〈パンセ賞〉

[「考える箱」](#) [丁史ういな](#) 獲得☆ 3.778

[「宅配物」](#) [ウツミ](#) 獲得☆ 3.545

[「CUBE」](#) [Wheelie](#) 獲得☆ 3.400

〈まごころ賞〉

[「ギフト」](#) [やぐちけいこ](#) 獲得☆ 3.100

〈同じお題を用いた作品〉

[同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介](#)

終わりに

終わりに

奥付



「てきすとぽい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぽいは、2012 年 2 月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集う WEB 作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013 年 1 月より てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。



「てきすとぽい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぽい杯は、制限時間 1 時間＋推敲 15 分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第 5 回てきすとぽい杯

会 場 : <http://text-poi.net/vote/15/>

お 題 : テーマ「箱」

箱を題材に、小説を書いてください。

「箱」という言葉は直接使わなくても構いません。

投稿期間 : 2013 年 5 月 17 日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013 年 5 月 18 日 0:00 ~ 2013 年 5 月 26 日 24:00

第 5 回は、平日・金曜日の開催でしたが、全部で 10 の作品をお寄せいただきました。

また、ユーザー企画として「勝手に連動 第 5 回ぽい杯スピンオフ賞」も開催されました。

第5回募集要項

【投稿について】

投稿期間：

5月17日（金）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間 1 時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとばい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/15/>

てきすとばい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲＆投稿してください。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

【審査について】

審査期間：

5月18日（土）0時 ～ 5月26日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとばいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

第5回審査結果

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1位 ☆ 4.091

「ここと、pediophobia に関して」 太友 豪

<http://text-poi.net/vote/15/3/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:32

2位 ☆ 4.000

「失われた古代文明 ※グロ注意」 碧

<http://text-poi.net/vote/15/1/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:28 最終更新: 2013.05.17 23:39

3位 ☆ 4.000

「僕の宝箱」 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/15/7/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:42

4位 ☆ 4.000

「PANDORA BOX」 茶屋

<http://text-poi.net/vote/15/2/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:32

5位 ☆ 3.900

「地球は丸くなかった！」 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/15/9/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:44

6位 ☆ 3.818

「10年の期待」 住谷 ねこ

<http://text-poi.net/vote/15/6/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:38

7位 ☆ 3.778

「考える箱」 丁史ういな

<http://text-poi.net/vote/15/5/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:37

8位 ☆ 3.545

「宅配物」 ウツミ

<http://text-poi.net/vote/15/4/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:35 最終更新: 2013.05.18 00:42

9位 ☆ 3.400

「CUBE」 Wheelie

<http://text-poi.net/vote/15/8/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:42

10位 ☆ 3.100

「ギフト」 やぐちけいこ

<http://text-poi.net/vote/15/10/>

投稿時刻: 2013.05.17 23:35

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとばい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/15/>

《大賞 1 作品》

獲得☆ 4.091

「ここと、pediophobia に関して」

著：太友 豪

<http://text-poi.net/vote/15/3/>

社会の敵の上位候補者、とされる主人公。

彼がそのように生まれついた理由、そして社会が彼に下した判断とは……？

短い文章の中で、「箱」という言葉を使わずに表現された箱、世界観、

人間の在り方への問いまでもが凝縮された、本格SF作品でした。大賞おめでとうございます！

《入賞 3 作品》

獲得☆ 4.000

「失われた古代文明 ※グロ注意」

著：碧

<http://text-poi.net/vote/15/1/>

パパと訪れた古代文明展。展示されていたのは、古代人が使っていたという不思議な箱、箱。

……その正体をじわじわと予感させつつ、古代人と主人公たちの対比を丁寧に描いた、

分かっているにもかかわらず Google 検索したくなる（笑）少々危険なSF作品でした。

獲得☆ 4.000

「僕の宝箱」

著：永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/15/7/>

押入れの中にひとつずつ増えていった、僕の大切な思い出をしまった宝箱。

大学生になり、かつての思い出の彼女と再会するも、それがやがて……。

思い出と、箱と、彼女への想いがもたらす結末を巧みに描いた、完成度の高いショートショートでした。

獲得☆ 4.000

「PANDORA BOX」

著：茶屋

<http://text-poi.net/vote/15/2/>

パンドーラ、または契約の箱とも呼ばれる兵器を操り、戦いを繰り広げる「契約者」たち。

契約の箱とは、そして、彼らが戦いあう理由とは……？

登場する小道具やキャラクターの個性が魅力的な、疾走感のあるライト小説でした。

《特別賞》

《新・地球論賞》

「地球は丸くなかった！」

著：工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/15/9/>

丸い地球と、丸くない地球について、魅力的な思考が展開された作品でした。

《パンセ賞》

「考える箱」

著：丁史ういな

<http://text-poi.net/vote/15/5/>

この世界に考える葦が存在するのならば、たぶん考える箱だって存在するのです。ここに。

《まごころ賞》

「ギフト」

著：やぐちけいこ

<http://text-poi.net/vote/15/10/>

贈る相手への想いがじんわりと伝わってくるような、そんな作品でした。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！
素晴らしい作品をありがとうございました。

（次のページから、作品が始まります。）

《大賞受賞作品》
ここと、pediophobia に関して
太友 豪

「きみと話すと社会の敵の上位候補者とは思えないな」

中性的な顔立ちの心療内科技師はそんなことを言った。フィクションの世界では、中性的な顔立ちは容姿が整っていて魅力的であることの言い換えのように使われることが多い。今いるのは現実なので、ザンネンながら中性的な顔立ちは、なんだか怖い。

生身の人間のはずなのに不気味の谷のようなものを感じさせる。

言うまでもなくこの国では、母親のお腹にいるときから遅くとも出生管に移される前にはナノマシンを注入される。ナノマシンは情緒を安定させ、知能を向上させ、セクシュアリズムを固定する。

生まれつきの病気、犯罪者、そして本物の同性愛者はこの国にほとんどいない。

ある種の性的嗜好までもが、病気の種類としてとらえられることに人権団体は反発したが、ユーザーである親たちの希望によってセクシュアリズムの安定化はナノマシンのもっとも早い時期に標準仕様となった。この国では同性愛者、小児性愛者向けの新作ポルノは、俺の知っている限りでは存在しない。市場原理が働いたというわけだ。

何事にも例外はあるように、その少数の例外の一人が俺だ。

胎児からのナノマシンによる『治療』が義務化されても、無知や無関心で生まれる直前まで医療機関で診察を受けない母親がいる。出生後もナノマシンによる『治療』はある程度効果があるが、その確実性は多少下がるのだという。

そういった子供たちのほかに、なぜかナノマシンが宿主の胎内で培養して放出するレトロウィルスによるを免れる人間がいる。原因はよくわからない。

ナノマシンに施された欲張りな不正改造による誤動作とも、別のベンダーによるナノマシンを体内に持つ親同士が結婚し子を為した結果とも言われているが、どちらも都市伝説のようなものだ。

問題は、俺もそんな人間の一人と言うことだ。技師が俺のことを社会の敵候補者と呼ぶのは、俺が殺意を持つことが出来、あるいは殺意もなく人を殺すことができる可能性があるためだ。

俺は嘘つきで、平均身長から明らかに逸脱して背が高く、閉じこもりがちになったり逆に元気になりすぎたりすることがあるらしい。もしかしたら同性愛者なのかもしれない。

そんな俺の治療にあたる心療内科技師が性別年齢不詳の人物というのはもしかしたら相当な深謀遠慮があるのかもしれない。

「きみのナノマシンはセンターへ送信しているデーターを改竄している節がある。きみの健康状態を知るた

めに実際の採血が必要不可欠だ――この話は、何度かしたような気がするけれど」

医者という職業人はほとんどいなくなってしまったが、国民はナノマシンを調整し、ひいては自分たちに幸福な生活を与えてくれるナノマシン調整技師を心から尊敬している。

国から認可を与えられた技師は国民健康保険サーバにアクセスしてデータを読むことができる。ナノマシンのベンダーから、最近の食事、酒はどれくらい飲んだのかまで簡単にわかる。

「まあ、壊れナノマシンなのだろうけどね」

一瞬自分のことをフィクションのスパイのようでかっこいいと思った俺に心療内科技師はなかなかひどいことを言う。

ナノマシンでは思いやりの心は身につかないらしい。

俺は唐突に自分の座っていた椅子を持ち上げると、心療内科技師に向かって思い切り振り下ろした。

技師は頭部から積層湿潤シリコンの人工頭脳をこぼしながら床に倒れ込んだ。

「――」

人工頭脳に織り込まれた神経回路がショートしたのか、技師は地上に打ち上げられた魚のように口をばくばくとうごかすばかりだった。

このような器物破損はすでに三百回を超えている。

pediophobia。

それが俺に下された診断名。人形恐怖症と、小児恐怖症の二つの意味を持つ。

俺は少なくとも、人間に似せてつくられたロボットやアンドロイドの存在を我慢できない。少し気を抜くと、理性が止めるまもなく暴力を発動させて破壊してしまう。

いまのところその相手はヒトガタだけだが、いつの日か小児に対しても発揮されるかもしれない。

何せ俺を診断したのはナノマシンなのだ。壊れかけの俺のナノマシンだが、この診断だけは正しいのだろう。

俺は一生――『ここ』からは出られない。

投稿時刻 : 2013.05.17 23:28

最終更新 : 2013.05.17 23:39

獲得☆ 4.000

《入賞作品》
失われた古代文明 ※グロ注意
碧

「ねえパパ、これ、なあに？」

目の前の大きな、大きな箱を指して、僕はパパに尋ねた。パパは間の抜けた顔で首を傾げている。

「なんだろうなあ。皆目検討もつかないなあ」

「すごく大きいね。何に使ったんだろう」

「なんだろうなあ」

パパは興味がなさそうだ。どうしてこんな不思議で大きなものの前で、そんなにつまらなそうな顔が出来るんだろう！

目の前の大きな箱は、多分樹脂で出来た六面体で、一面だけが液晶組成物のようなもので出来ている。その面が僕らの方を向いていて、手前には、これまた樹脂製の板が置いてあって、その上に僕らの手にも取れそうな小さな箱が規則正しく並べられている。

「すみません、これは、一体なんなんですか？」

パパに聞いても埒が明かないので、僕は暇そうにしていた学芸員さんと呼んで尋ねた。でも学芸員さんもすごくつまらなそうな顔をしている。

「えー、それがですね、古代人が家庭に必ず一個は持っていた日用品だと思われるのですが、何に、どうやって使われていたのかは、よくわからないんですね」

「そうなんですか……これは、機械なんですか？ 動かしたりできないんですか？」

「相当な電力を使うものなようで、ここではちょっと……」

そうなんだ。僕はがっかりした。でも電気を沢山使うものなら、しょうがないな。古代人が滅んでしまった理由にはいくつかの説があるけれど、最近地球の資源を使いすぎて自滅したんだって説が主流らしくて、僕らも節電を心がけるようにしている。

今日、僕はパパと一緒に「失われた古代人の文明展」にやってきている。かつてこの地球で栄華を極めたが、もう何千万年も前に滅びてしまった、二足歩行の哺乳類の遺跡の展覧会だ。不思議で面白いものが沢山ある。二足歩行の哺乳類がこの地球のあちこちを歩いていて、当時は僕らの先祖より力が強かったなんて、ちょっと想像しにくい気もするけれど、ここにある色んなものを見ていると、ワクワクしてくる。

例えば、あの冷蔵庫っていう縦長の箱は、食べ物を冷やして保存しておくための道具らしい（これも電力を消費するから今は使えない）し、その隣にあるマイクロウェーブっていう立方体の箱は、その名の通りマ

マイクロウェーブを当てて食べ物を温めたりするらしい(これも電力を消費するから使っているところは見られない)。電力を使わないもので、僕が面白いと思った道具では、窓っていうのがあった。ガラス板の四方がアルミで覆われているもので、詳しい用途は不明なんだけど、お隣の家族との仕切りに使ってたっていう説が有力らしい。僕らにはよく理解できないけど、古代人は秘密主義で、ぶらばらしいってやつにすごくこだわってたみたいだ。

こんな色んな道具を開発する賢くて行動力のある種だったのに、どうしていきなり滅びてしまったんだろう。やっぱり、テレビで言ってたように、電力の使いすぎだったのかな？

ちなみに、保守派のママは古代人のことが嫌いだ。曰く、そもそも地球上の生命体としては、僕達の方がずっと昔からいた由緒正しい種族だっていうのに、新参者の古代人達が身の程を弁えず我が物顔で地球を占拠し、挙句僕達の祖先に戦いを挑んだ。そしてその戦いの末に僕達の祖先が勝ち、古代人は滅んだ。当然の報いなんだと。

本当なのかどうかはわからないけど、こういう説を支持している団体も結構いる。神様を信じているんだ。

「おい、そんなのより面白いアトラクションがあるぞ」

パパに言われて視線を移すと、子供が群がっている、三角屋根の箱があった。僕らの身長ぐらいの高さの、家みたいな形の箱だ。素材は何かな。紙にも見えるけど……

「あれは何なの？」

「あれは、一説によると、我々の祖先と古代人の戦いで、古代人がしばしば我々に対して仕掛けてきた罠らしいぞ」

「罠？」

「えーと、パパはお前みたいに頭がよくないから、詳しいことはわからないが、あの中に敵を誘い込んで、閉じ込め、殺す仕組みになっているんじゃないかな」

「閉じ込めて殺す！ 恐ろしいね。マイクロウェーブを当てたりしたのかな……」

「大丈夫だ、今は展示用に危険な部分は撤去してあるはずだ。さあ、入ってみようじゃないか？ 我々 *Blatella germanica* 文明の原点を感じられるぞ」

《入賞作品》
僕の宝箱
永坂暖日

大切なものを箱にしまう子供だった。一つの箱に、一つの大切なもの。そうすると、お菓子の空き箱でもそれが宝箱となったんだ。

ジュースの王冠、道端で拾ったパチンコ玉、校庭の砂の中に紛れるきらきらした透明な粒、表面がつるりとした黒い石、綺麗な赤色の葉っぱ等々……他愛もない、今にして思えばどうして大切だったのかも分からないようなものばかりだったけど、押し入れの奥深くに隠した宝箱が一つ増えるたびに数をかぞえて一人で喜んでいたよ。

小学校の高学年になるまでその習慣は続いた。きっと小学校を卒業して中学生になり、高校生になり、大学生になって大人になっても、大切なものを箱に入れ続けると思ってた。

でも、大切なものをいつでも箱に入れられるわけではないと気付いたのは、小学五年生の三月。クラスメイトの美都姫ちゃんが、六年生になると同時に転校すると聞いた時だ。

彼女のことが大好きで、学校や塾にいるどの女の子より大切で、どこにも行ってほしくなかったけど、美都姫ちゃんを箱に入れられるわけがない。だから仕方なく、美都姫ちゃんとの思い出を――実際には空だけど――百円ショップで買った鍵付きの箱に入れて、押し入れの奥にしっかりとしまいこんだんだ。そうすれば、ずっと美都姫ちゃんのことを忘れないと思ってね。

思い出も箱にしまうようになったのは、それからだね。どうしても忘れたくない、いつまでもその時と同じように覚えていたい思い出を鍵付きの箱に入れて、押し入れの奥に積み重ねていった。

高校の一年生の頃までは、思い出の詰まった箱もどんどん増えていったよ。急に増えなくなったのは、二年生になったくらいから。まあ、忘れたくない思い出ができるような出来事がほとんどなくなったんだ。その理由は、想像に任せるよ。

大学に入ってもしばらくは変わらない状態だった。大学入学と同時に一人暮らしを始めて、小さなワンルームには狭い押し入れが一つしかなかったから、むしろそれでよかったと思ったよ。

でも、やがて狭い押し入れじゃ事足りなくなるほど、また大切なものや思い出が増えていったんだ。――美都姫に再会したから。

嘘みたいな話だけど、大学で、勧誘されてなんとなく入ったサークルに、彼女がいたんだ。

美都姫は最初、僕のことを覚えていなかった。でも僕は、忘れてなんかいなかった。箱に、彼女の思い出を大切にしまっていたから。

美都姫もすぐに僕のことを思い出して、それがきっかけで昔みたいに、いや昔以上に親密になった。僕

の部屋の押し入れは、美都姫との新しい思い出や彼女からもらったものの入った箱でいっぱいになったよ。

もうこれ以上は入らないかな、そう思っていた頃だった。美都姫が別れ話を切り出したのは。小学生の時みたく親の都合で遠くに行くわけでもないのに、僕から離れたいと言ったんだ。

彼女はそう言ったけど、僕にとって相変わらず美都姫は大切な人だった。それに、何もできない小学生じゃないからね。

僕は、大切なものを箱にしまう子供だった。今も、大切なものは箱にしまっている。ただ子供の頃と違うのは、箱はお菓子の空き箱なんかじゃなくて、もっと頑丈で鍵もかけられるものだけだね。さすがに、大切なものが増えすぎてこの押し入れには入らなくなってしまった。

僕の一番大切なものが入っている箱はどこにあるかって？

それは教えられないよ。僕にとって、大切なものが入っている箱は宝箱だからね。自分の宝箱のありかを、他人に教えるわけないだろう。

※「勝手に連動 第5回ぽい杯スピンオフ賞」に、関連作品が投稿されています。

<http://text-poi.net/vote/16/5/>

《入賞作品》
PANDORA BOX
茶屋

「拘束解除」

その声をきっかけに、ミナコの掌中に置かれた立方体のオブジェクトが幾何学模様に沿って緑色の光を放ち始める。

「Jawohl, Herr Leutnant.」

立方体から電子的な男の声が響く。

それと同時に箱は展開を始める。まるで機械じかけのパズルのように、奇妙な幾何学的形体をいくつも経過して、その大きさを増していく。

「展開終了と同時に目標を制圧」

「Ja」

もはや立方体の原形は何処かへ言ってしまい、翼の生えた人のような形の存在とかしていた。甲冑を纏った騎士のような、いやアニメに出てくるロボットのような姿といったほうがいいかもしれない。

「Waffe : Spiess」

人型がそう音声を放つと、その手には槍のような武器が展開されていった。

「なあ、本当に安心していいんだろうな？」

「左様。御敵の防衛圏内は既に離脱しているはず故」

「そうか。それならいいんだが、何だか嫌な予感がする」

荒野を疾走する影があった。

地上からわずかに浮遊したバイクに似た乗り物に乗っているのは、キサラギというものである。そしてキサラギの会話の相手、それはバイク自身である。

「御大は気苦労が絶えぬな」

「うるせえ」

ふと、何か、風を貫くような音が聞こえたような気がした。

「掴まれい！」

「は？」

バイクは急激に加速し、ランダムに蛇行した。一瞬遅れて、背後に複数の爆発が生じる。

「くそ！やっぱり撒けてなかったじゃねえか！！」

「面目次第もない！」

爆煙を突き破って、羽を生やした人型の存在が姿を表わす。

「くそ！ グラーシーザか」

「御大！！」

槍撃を辛うじて避けて行くものの、衝撃が二人を襲う。

「鬼切、収縮！」

「御大！？」

「うるせえ！ 形を変えるぞ！ ガタガタ言わず収縮しろ！」

「御意」

一瞬のうちにバイクが消え、キサラギは固い地面の上を転がるはめになる。強い衝撃がキサラギの体を打ちのめす。グラシーザの槍はそれを見逃すはずがなかった。

閃光。

音。

衝撃。

一際大きな爆発が一体を包み込んだ。爆心地は大きくへこみ、クレーターのような形状を作り出した。

「Strategie Vollendung」

グラシーザの無機質な顔は表情を変えることもなく、爆炎を見つめていた。

彼は『契約の箱』あるいは『パンドーラ』と呼ばれる意志を持った様々な形に変形できる兵器だ。その力を利用できるものは、契約者、グラシーザにとってはミナコであり、たった今爆炎の中で消失した鬼切にとっては、やはり一緒に消えたキサラギである。

他の『パンドーラ』のことを仲間、だとは思ったことがない。

結局は戦う運命にあるのだ。

はじめから、戦う運命に。

だが、グラシーザの意志機関には奇妙なわだかまりのようなものができているのも確かだった。

そんな感情は、彼らにとっては不要なものなのだろうか。

わからない。

だが、今、この時のグラシーザにとっては不要以外の何物でも無かつただろう。

その奇妙な感慨が、一瞬の間になったのだから。

気付くのが一瞬遅れた。

気づいて避けた時には、右腕が肩から切り離されていた。

日本刀を手にした人型の何かが、グラシーザの腕を切ったのだ。

「復活！」

その声は、キサラギのものだった。

「Was？」

「鬼切装甲形態展開完了。危のう御座ったぞ、御大」

「だが、うまく言ったぜ？」

「御大には敵わぬ」

キサラギは展開した鬼切を鎧として纏ったのだ。

「反撃開始だ！」

「御意！」

振り下ろされた刀を返して切り上げる。胸先三寸で避けたグラシーザであったが、のけぞった形になっ

て大きく体勢を崩していしまう。キサラギは大きく踏み込むと刀を持ち替え、グラシーザの胸に突き立てた。だが、刀が胸を貫く前にグラシーザは翼を大きく展開し、それを盾の代わりに刀を防いだ。

「グラシーザ撤退だ」

グラシーザの聴覚機関にミナコの声が響いた。

「Nein」

グラシーザがミナコに逆らったのはその時が初めてだ。グラシーザにはそれが何故だかわからなかった。だが、戦わなければならなかった。戦わずにはいられなかった。

「グラシーザ、もう一度いう、撤退だ」

ミナコは冷静だった。少なくとも表面上は。

だが、そこに動揺があることはグラシーザにはわかった。

「Ja」

グラシーザが槍で己の足元をつくと大きな爆発が起きた。爆炎が鬼切とグラシーザを包んだ。

「見失ったか」

「反応が御座らぬ。左様」

「ったく、来るときも速けりゃ逃げるときも速いな」

「兵法に沿ったやり方で御座るな」

「鬼切、収縮。んで持ってバイクに展開」

「御大、たまには自分の足で歩いてみぬか」

「そういう冗談はこういう所ではやめてくれ」

そう言ってキサラギは周囲を見渡す。

限りなく広い荒野。建物は一つも見えない。それどころ草木は一本も生えていない。

まさに不毛の地、死の土地である。

ここは関東。

かつて大都市のあった場所。

※「勝手に連動 第5回ぱい杯スピンオフ賞」に、関連作品が投稿されています。

<http://text-poi.net/vote/16/3/>

《新・地球論賞》
地球は丸くなかった！
工藤伸一@ワサラー団

「地球は丸かった！」と言った宇宙飛行士の名前を調べようと思ってネットで検索してみたら、実は「地球は青かった！」という宇宙飛行士ユーリイ・アレクセーエヴィチ・ガガーリンの台詞を間違えて覚えていただけだった。とはいえ僕の他にも「地球は丸かった！」だと思い込んでいた人の書き込みを見つけたので、もしかすると本当に誰か有名人が使った言葉なのかもしれない。

今の所それが誰なのか判明していないけれど、地球を中心にして他の天体が動いているとカトリック教会が信じていた「天動説」に逆らい、地球も他の星と等しく動いている天体のひとつに過ぎないとする「地動説」を唱えた天文学者ガリレオ・ガリレイが、教会によって裁かれた際に言い残したとされる「それでも地球は動いている！」と混同したのではないか、という回答が「Yahoo!知恵袋」にてなされている。

「言い残したとされる」という曖昧な書き方をしたのは、本当にガリレイがそういったのか議論があるらしいからだ。しかしこのセリフに関しても僕は記憶違いをしていて「それでも地球は回っている！」だと思い込んでいた。しかもネット上にはそのような記述も見られることから、そうするとこれもやはり影響力の強い誰かが使ったフレーズなのではなかろうかと考えている。

いずれにせよその言葉が発せられたという逸話からして疑われてしまっているとなれば、どちらの言葉が正確なのかと考えてみても無駄ということになる。それは冒頭の「地球は青かった！」にしても同じで、正しく訳すなら「青みがかった」程度の表現だったとウィキペディアには書かれている。のみならず「円光」なる言い方をされていたとする記述もあり、それが真実なのであれば「地球は丸かった！」と言っているも同然ということになるが、しかし残念ながらそこには「要出典」のツッコミがなされているため、実際の所は分からない。

そのような次第で「地球」がどのようなものであるかについて僕の記憶は当てにならないのだけれど、どうやらそれは僕だけではないことだけは確かであり、そのようにして考えてみると、そもそもガリレオやガガーリンが用いたとされる印象的な名言というのも、果たして本当に実在していたのか怪しんでみることもできるだろう。つまり当人や周囲の人間の記憶も信頼性に欠けるかもしれないということだ。

そして何故そのような事態が引き起こされてしまうのかという段に至って奇妙に感じられるのは、われわれ人間もまた自分という個体を中心にして世界の方が勝手に動いているとする「他動説」とでも呼ぶべき感覚と、そうではなく自分自身もまた他の物質同様に動き続けるとする「自動説」の対立構造があるのではなかろうかという疑惑を拭えない事実である。本当にそのようなものがあるのか分からないのだから、それを事実と呼ぶのもおこがましいが、少なくとも僕自身はそれを事実であるかのように信じてしまっているのだから、とりあえずそう表記するほかないのである。

ここまでこうして編み出された文章の軌跡は、そんな覚束ない現実認識に寄って描かれているに過ぎないものだから、幾らどんなに「事実だ！」と主張してみたところで、あくまでもそれは僕の脳内にしか存在しない主観的な構想に過ぎない。などと自己分析できているからには、いちおう客観的な見方も出来ている可能性は否定できないが、このように観念的な発想は、深く広く思索の限りを尽くした哲学者でもない限り、強い説得力を持ちうることはできないため、早々に諦めた方が得策だろう。

それでも地球は回っているのだから丸くて当然に思えるけれど、さきほど言ったように人間もまた地球と同じようにして運動しているのであれば丸くなくてはいけなくなりそうにも思えてくるものの、やはりこれまた何の根拠もない空想であり、人体が総じて球体であるなんてことはありえない。しかしそれは動いていない状態を想定しているからそう言えるのであって、素早く動き続ける人体ならば、傍目から見てそれが球体に見えても何ら不思議ではない。

そのようにしてまた振り出しに戻ってみると、実は誰も言っていなかったかもしれない「地球は丸かった！」という言葉にもそうではない疑惑が浮上してくるのをどうしても禁じ得ないのだから困ったことである。すなわち地球は高速で回転している限り球状に見えるものだけけれど、もしそれを止めることが出来たなら、実際には四角いとも考えることもできるのだ。ならば「地球は丸くなかった！」そして「地球は四角かった！」と言う者がいたとして、それを否定することは難しいのではなかろうかというような戯言を信じてみたくもなってくる。

地球が四角いのなら人間が移動する際にその角の部分で落下してしまうような気もするけれど、地球には大きな重力があるから形状がどうであろうとそのようなことは起こらない。なおかつそれはルービックキューブのようにして複雑に絡み合う立方体が、地球を動かすのと同じ力の作用によってあらゆる現象を組み換えながら、正しい組み合わせを求めんとする強い意志に導かれて、万物を四角たらしめる行程の最中を漂う我ら人類もまた、四角いロボットのような無意識を併せ持つ地球の子供にすぎないのだった。なんて夢をしながら今夜も、四角い朝に向けて、四角いベッドで眠るのだった。(了)

※「勝手に連動 第5回ぽい杯スピンオフ賞」に、関連作品が投稿されています。

<http://text-poi.net/vote/16/4/>

10 年の期待

住谷 ねこ

2013 年 5 月 17 日 金曜 午後 8 時。

おめでとう私。

私は今日、24 才になりました。

そして いま 小学校以来の親友
田中美以奈と渋谷のとある店にいる。

本来、私は誕生日には出かけない。

というのも……

うちの家族はわりとイベントごとが好きなので
誕生日といえばパーティとまではいかないにしても

たとえば 弟だったらプリンが好きだから
いつもは市販のプリンだけど
ちゃんと手作りしてフルーツも飾ったプリンがつくとか

たとえば お父さんだったら
ビールが一本増えるとか
それもいつもの安いのじゃなくて
コロナの瓶 ライムつきだったりとか

お母さんの場合は わりと面倒だ。
なにしろ彼女が普段食卓を支配しているわけだから

まあ… 後片付けをするとか
普段より 「おいしいね」を連発するとか
その程度のことだけど

まあその程度とはいえ
さりげなくみんなが「誰か」の誕生日を
覚えていて

なんとなく 気に留めているというか
祝っているというか…
そういう家なので

まあ 彼氏とか友達も含めて
弟の場合は彼女とか
お祝いしてくれるとしても
別の日でもいいじゃんくらいなもので

なのに。
なのに。

今日は そういう
なにげない
いわずもがなの誕生日を
私は犠牲にして
出かけている。

それはなぜか。

それは これ。
この 縦横 高さ どれも 6・7cm の箱が原因だ。

この箱は、美以奈が私の 14 才の誕生日にプレゼントとしてくれたものだ。

真四角の 青いつやつやした紙に包まれて
オレンジのリボンをつけたこの箱は
だけど もらっていらい まだあけていなかった。

それには理由があって。
プレゼントはたいてい 学校の休み時間とか
帰りとかに渡したりもらったりしていたけど
この時は美以奈が あとで わざわざ家まで届けに来た。

もう 忘れてるのかと思ったので
すごく嬉しかった。

息を切らせてやってきた美以奈は
この箱を私におしつけながら
だけど ひとつ約束をして欲しいといった。

「これは 特別なものだから
今日あけてはいけない

明日もあさっても ずっとずっと
このまま 私がいいというまで
持っていて 絶対絶対あけちゃだめだよ

あけると大変な事になるよ。
もう 絶好だからね。
一生絶好だからねっ」

「そんなぁ じゃあ いつあけるの？
いつ いいって言うのよ？
誕生日は毎年あるんだよ？」

そういうと 美以奈は少し困った顔をして
「じゃ 10 年後っ
10 年後に 一緒にあけよう」

そうして今日、 ついに 10 年後の誕生日を迎えたのだ。

今日 会う約束をしたとき
当然 わかっているとおもっていたけど
美以奈は忘れていたらしく
ものすごく驚いていた。

「じゃ 開けるよ」

「……」

「なんか どきどきする
私たちの学校ではやらなかったけど

タイムカプセルとか開けるときこんな感じなのかねえ」

「……」

なんだか もったいないとおもいつつ
オレンジのリボンをほどく。

つやつやした紙は とくにテープで止めてるわけではなく
そのままカサカサと 開く。

「あのさ……それ 開けないほうがいいと思うんだよね」

「?? なんで？」

「いやぁ まさか ずっと 本当に持ってるなんて
思わなくて…… つか 今日まで忘れてたっていうか……」

何を言ってるんだ? と思いながら
ふたに手をかける。

ふたは 少しの抵抗感を残して ぽふっととれた。

中には……

中には……

「だからさ、 ごめん」

中は 空っぽだ。

「あの日さあ。

あの誕生日の日。

プレゼント買うのすっかり忘れちゃってて

おこづかいも もうなくて

だけど あの頃は そういうのってはずせないからさ。
そういうことにしたわけ。

10 年もたてば忘れと思ったし

まさか そのままズーっと 友達するかもわからなかったじゃない?

げんに 高校のときは別々で疎遠になってたんだしさ」

10 年 楽しみに ずっと 大事に 机の上にあった
この箱の中には何もは言ってなかったのだった。

「まあ でも 10 年楽しんだと思って…… ね？
これで許して？」

そうって 美以奈は 箱の中に
ぽんと いっこ からあげを入れた。

《パンセ賞》
考える箱
丁史ういな

俺はベンチの下にいた。まったく、ベンチの腰掛けでいいだろうに、なぜこんな窮屈なところに押し込むんだ。

目覚めたら俺はここにいた。公園だ。道路に面した小さな公園。ベンチはどうやらその隅に設置されているようだ。俺はその下にいる。地面と腰掛けの、小さな隙間に。

今日が休日だったか知らないが、子どもたちの歓声が聞こえる。視線の先を、サッカーボールが転がっているのがかろうじて見えた。

ふん。なにが聴覚だ。なにが視覚だ。こんなところには最低限のはたらきしか齎さない。感覚器官などというものは、有することよりも、作用することのほうが重要なのだ。まあ、そんなことはどうでもいい。

俺はここから這い出ようと試みた。しかし無論のこと無理だった。体が動かない。俺は動けないのだ。

サッカーボールが転がってきた。ころころころろ。無愛想に転がってきた。それを少年の足が追いかける。いや、少年である確信などない。しかし少女ではないと思う。俺の第六感が作用したのだ。

ははは。だからなんだというんだ。第六感が作用したところで、それが利益を形成しないのなら意味ないじゃないか。だからペテン師は金を稼ぐ。だからクリエイターは成り立つ。だからあのジジイは、俺を売り飛ばすことができたのだ。

俺はいくらで売れたのだろう……。

少年の手は華奢だ。日に焼けて赤茶けているが、筋肉がいささか足りない。小学生になったばかりだと推測した。それが合っているか確かめる能動的な術はない。

少年は俺に気付かない。サッカーボールは無情に俺から遠ざかっていった。ああ、俺が声を出すことさえできたなら！

おお、万軍の主よ。……あーもう面倒くせえ。俺は祈祷が嫌いだ。俺を売っていた店のすぐ向かいに、十字架が掲げられていたが、俺はその建物から出てくる人間たちが嫌いだった。彼らはたまに店にやってくる。そして商品に指を示すのだ。これなに？ 一番新しい記憶では、その台詞を吐いたのはおさげ髪でそばかすのある女だった。ジジイは妙に喜んだ顔をして、商品の蘊蓄を語っていたもんだ。数分も経てば、誰もがジジイの話に愛想がつく。そして自分の発言に後悔するのだ。俺は、指をさされたことがない。冗談じゃない。俺がそんなに、目につかない地味な存在だということのか？ ああ？

子どもたちの歓声がうるさい。学校はどうしたのだろう。今日は日曜日なのだろうか。ならば教会はど

うした。俺はおさげ髪が教会に出入りするのを、毎週のように見ていたぞ。

しかし気付いた。もう夕方なのだ。俺は朝だとばかり勘違いしていたが、ベンチの下に差し込んでくる光は、明らかに太陽が沈むときのものだ。俺はどれだけの時間、意識を失っていたのだろう。記憶が曖昧だ。そもそも俺は、なぜこんなところにいるんだ。

推察。それしかない。俺は動けない。ならば考えるのみである。人間は考える葦だとどこかで聞いたことがある。ならば俺は、さしずめ考える箱か？ ふん。葦よりは丈夫そうだ。

子どものひとりが、帰ろーぜ、と言った。他の少年たちも同意する。ママのところに戻るのだろう。ママ、ふん。

俺はママを知らずに過ごしてきた。この生活の中で、ママがなんの意味を齎す？ 俺に母乳は不必要だ。俺はものを食わずとも過ごすことができる。向かいの教会から流れるピアノの音、それだけあれば満腹だった。はて。この近辺に教会はあるだろうか。この公園は、俺の家からどれだけ離れているのだろう。

ジジイの顔が見たい。

推察。俺がなぜここにいるのか、それを考えよう。といっても、答えのパターンは数少ない。俺はそのうちのひとつを選択した。つまり、俺が捨てられたという可能性である。俺を買ったはいいが、客は俺の対応に困り、結局特段な使用もせずには放棄したのではないか。確かに俺は、使われづらい。俺を使うのは難しい。だから俺はなかなか売れなかったのだ。

俺は買われた後、客の車に乗せられた。車は最新型のものだった。型番など知らないが、光沢がありエンジン音も今までにない静寂を纏っていた。そこから記憶が曖昧なのだ。そして目覚めたらここにいた。どこかの公園の、ベンチの下。地面と腰掛けの隙間。狭い。暗い。

蟻が傍を歩いている。どうか俺に触れるなよ。俺は祈った。祈った。どうかこの考える箱をお守りください。はっ、なんてこった。蟻は俺に目もくれずに、そのまま通り過ぎていきやがった。

俺がなぜここにいるのか。仮説ならいくらでも立てられる。しかし、省みるに、そんなことは関係ないではないか。俺は今をどうにかしないとイケない。かどうかを考えねばならない。ああ面倒くさい。俺から安息を奪ったのは神か、それとも客か。あるいはあのジジイか？……ったく。

ああつまらない。気付けば公園には誰もいない。俺しかない。もしかしたら俺の感覚を超えた地点に居眠りした老人でもいるかもしれない。だが俺が気付けないのならそれはいないのと同義だ。俺は退屈を感じているのだ。

太陽が沈んでいくのが、光の加減で窺える。俺はあの太陽が苦手だ。俺の家を、なんども覗く。プライバシーを知らないのか。教会の窓にも手を伸ばしていた。きっと礼拝を監視していたに違いない。あの面倒くさい存在が、俺には非常に鬱陶しかった。だから反動的に夜を俺は好んだ。太陽がもうすぐ沈みきる。

また蟻だ。

あああ。あああ。太陽が完全に沈みやがった。夜だ。真っ暗だ真っ暗だ。

そうだこんな真っ暗な夜に、俺は大きな明るい花を見たことがある。店の窓から見える空が、突然華やいだのだ。向かいの教会の窓が、薄く染まっていた。俺は無邪気に楽しんだものだ。真っ暗が一気に明るくなったのだ。俺も光り輝けたらと思ったこともある……。

そうか。俺は爆弾なのだ。いや俺のなかに爆弾が入っているのだそうさそうさ。そうに違いない。俺はテロリストに買われてこの公園を爆発するのだそのために買われたのだ俺は爆発するのだ俺は。

ちくしょうまた蟻だ。

投稿時刻 : 2013.05.17 23:35

最終更新 : 2013.05.18 00:42

獲得☆ 3.545

宅配物

ウツミ

「お届けもので～す」

呼び鈴に応えてアパートのドアを開けると、そこにはダンボール箱を抱えた配達業者が立っていた。

「あ～、ここにハンコお願いしま～す」

「はぁ……」

とりあえず、言われた通りにポンッとハンコを押して荷物を受け取る。

「ども～、ありがとございました～」

なんとも気の抜けたような調子でドアを閉めて立ち去ろうとする配達業者。

「あ～、そうそう」

が、ドアが閉まる直前、彼は思い出したように振り返り、言った。

「もしも私が詐欺師なら、あなたは今頃地獄の淵ですよ？」

「……えっ」

僅かなドアの隙間からこちらを覗きこむ配達業者。

なぜか真顔。さっきまでのテキトーな調子はどこに行ったのかと思うほど真面目な声。

そして呆然とする僕の目の前で、最後まで目と目を合わせたまま、彼はガチャンと扉を閉めた。

あとに残されたのは、僕と受け取ったダンボール箱だけ。

「え～と……」

――え、今の何？どゆこと？

回らない頭で考えるが、考えても分からないものはやっぱり分からない。

念のため外を確認して見るが、あらかたの予想通り配達業者はもはや見る影もない。

「はぁ……何だったんだろ、あれ」

仕方が無いので、とりあえず受け取ったダンボール箱を観察する。

まず目に入るのは、上面にデカデカと書かれた『絶対に開けるな！！』という文字。

しかもご丁寧に、下に小さく『いいか、絶対だぞ！絶対だからな！』と書かれている。

「え～……」

そんな物送ってこないでよ、と思う。

とりあえず受け取った時はそこまで重くはなかった。重過ぎず、軽くなく。

「差出人は……っと」

見てみると、『差出人： 今あなたのうしろにいるの 様』となっていた。

とりあえず脊髄反射で後ろ回し蹴り。洗濯機にクリーンヒット。痛い。

玄関に置いておいても仕方が無いので、痛みが治まるのを待ってひとまず部屋に運び込む。

しがたない学生の一人暮らしでは、主な部屋はこの狭い六畳一間だけ。

そしてこのダンボール箱、そこそこデカイ。正直邪魔である。

「さっさと開封したいんだけど……」

しかしながら『開けるな！！』である。

——いや、待て。開けるなと言うからにはそれなりに理由がある筈だ。

もう一度ダンボール箱を仔細に観察してみる。

配達用の注意書きシールを発見。よくある『割れ物注意！』とかいうアレだ。

内容。『爆発物注意！』。ふざけるな。

そしてその横に、『←半分冗談です（はあと）』という但し書き。半分本気じゃねえか。

——さあ……。このダンボール箱、どうする……。！？

明らかに過剰な危険物アピールからはすごくイヤ～な予感が溢れんばかりに漂う。

しかしながら、開けないまま部屋に置いておくのも激しく邪魔である。

出来ればそっとゴミ捨て場に並べてあげたいが、腐っても自分宛ての荷物。大事な物だったら大変だ。

せめて中身を見てから判断したいところだが、判断した時には手遅れという可能性もある。

——どうする……。！どうしたらいい……。！？

汗の滴が頬を伝い落ち、心臓は早鐘を打ち、喉はゴクリと鳴る。

そこでハッと気付く。

——しまったっ！爆発物の場合、時限式って可能性も！？

さあ、考える時間さえ奪われてしまった。一刻も早く決断しなければならない。

このダンボール箱を開けるか、そっと部屋に置いておくか、ゴミ捨て場に投棄するか……。

「よし、見切ったっ！！このあからさまな危険物アピール、フェイクだなっ！？」

——そうだ、僕に危害を加えたいなら危険物アピールをする必要はない！これはハッターリだっ！！

僕は勢いよくダンボール箱の蓋をとめるガムテープを掴み……。引き千切ったっ！

……。何も起こらない。よしっ！

——ふっふっふ……。やはりこの注意書きはそれ自体が罠だったんだな……。

勝った！その確信が僕の胸を埋める。

そして、僕はダンボールの箱を……。開けた。

中に入っていたのはシュールストレミングの缶詰。

発酵食品。飛行機への持ち込み不可。通称・匂い爆弾。

僕は全力でブン投げた。

窓枠に当たった。

破裂した。

近隣住民が泣き出すほどの匂いが部屋に染み付いた。

僕はアパートの大家に追い出されるほど怒られた。

CUBE

Wheelie

西暦二〇八五年、地球に小惑星群が接近した。アメリカ航空宇宙局は数年前からそれを予測していた。隕石群は大気との衝突によって殆どが気化するはずであった。あくまで予測の時点では。

ブレッソンはキューブを踏まぬよう慎重に歩いていた。隕石雨の降り注いだ後、それを処理するのが彼らの仕事だった。

「こんなサイズの物は初めてじゃないか」

モリヤマは金属製のケースにキューブを拾い集めている。確かに今回のキューブにはかなりの大きさの物が混ざっていた。光を反射しない黒い立方体。ダイス程度ものから、最近ではランチボックスほどのサイズのものまで見かける。

「キューブから音波が出ているのを知ってるか」

隕石の納品を終え、ブレッソンはモリヤマとバーで安い酒を飲んでいる。

「音波？」

「奴らはそれを研究しているんだと」

ピスタチオの殻を剥きながら、ブレッソンは音波について考える。現在軌道上にある小惑星は、それぞれが歪な形状だ。正しく星屑らしい形の星屑たち。それが地球に落下する時、大気に洗われて細かい無数のキューブとなる。隕石雨の落下地点は立ち入り禁止となり、ブレッソンのような一部の「許可された労働者」が全てを回収する。

「つまりあれは粉々になったモノリスなんだ」

そう言ってモリヤマはガラガラと笑い、グラスに残っていたビールを飲み干す。下らない冗談だった。

キューブから何らかの電磁波や放射線が出ているのか、ブレッソン達には知らされていなかった。気休めの防護服が彼らの心を守っていた。

「音波ね」

肉体労働後の飲酒で適度な酔いを感じながら、ブレッソンは路地裏を歩いていた。虫の羽音を聞いたようなような気がして、顔を手で払う。だけれどその音は消えない。

スニーカーの爪先にこつりと何が当たる。黒いアスファルトの上に、黒い物体。

「キューブ？ 馬鹿な、こんな市街地で」

目を凝らしてみると、ビルの隙間の細い路地に、無数のキューブが落ちている。空から落下したものではない。隕石雨が降った地点は即座に立ち入り禁止になるはずだ。

「耳が……」

低いうねるような音が強くなってくる。キューブ達は磁石のようにじわじわと引き寄せあい、ブレッソンの足元に集まってくる。

「まさか、そんな」

強烈な頭痛に、その場に蹲る。

「こいつらはモノリスなんかじゃない。キューブは……」

誰かに伝えなくてはいけない。キューブは隕石なんかじゃない。これは……。意識が遠のいていく。彼らはブレッソンを静かに見下ろしていた。

《まごころ賞》
ギフト
やぐちけいこ

幸せな事があつたらきっと自然に笑えるでしょう。
落ち込んでいる人を見かけた時笑いかけたらほんの少しでもその人が救われたらいいな。

上手な言葉なんて見つからないけれどまた幸せそうに笑ってくれるまで待つしかないけれど。
精一杯頑張っていた事を知っているから。
みんなが知っているから。

今は休息が必要な時。
走ってばかりでは周りが見えなくなってしまうからゆっくり歩いて道草しながら景色を楽しもう。

もしかしたら新しい発見があるかも。
もしかしたら今まで以上に心が軽くなっているかも。
もしかしたら成長した自分に出会えるかも。

いろいろな気持ちを箱に詰めてリボンをかけよう。

そしてあなたに贈りたい。
両手を広げて待っている人達がいる事を。
いつでもその扉を開けて「ただいま」と帰って来てくれることを。

そんな人達のたくさんの気持ちの入ったこの箱はあなたへのギフト。

同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介

今回、お題の「箱」を題材に Twitter 小説を書いてくださった方がいらしたので、Togetter にまとめページを作成いたしました。

第5回てきすとぼい杯のお題で **Twitter** 小説

<http://togetter.com/li/508693>

また、ありがたいことに、てきすとぼい杯の連動企画をしゃんさんが開催してくださいました。

「箱」を題材に書かれた作品が2編と、第5回てきすとぼい杯参加作品の続編／番外編が3編、投稿されています。

勝手に連動 第5回ぼい杯スピンオフ賞

<http://text-poi.net/vote/16/>

よろしければ、これらの作品もあわせてお楽しみください。

※他にもございましたらリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。

終わりに

てきすとぼい杯、第5回は、平日開催の回となりました。

やはり平日夜の方が皆さまお忙しいこともあり、またおそらくは日程のご案内が不十分だったこともあって、参加作品数はこれまでよりもやや、少なめとなってしまったようです。

が、審査結果を見ましても、全体的に☆評価が高く、多くが☆3点台の後半以上と、作品のクオリティとしてはむしろ安定・上昇傾向にあるのでは……とも感じております。

特に今回は、凝った設定や、展開に一捻りある作品が多く、一読者としても非常に楽しい回だったように思いますが、いかがでしたでしょうか。

また、お題の「箱」につきましてはコメント等でもご指摘いただきました通り、どうやらSFジャンルとの親和性がありましたようで、大賞・入賞作品の内の3作品が何らかの形でSF要素を取り入れている、という、結果として大変SF色の強い回となりました。

前回のお題が少々特殊なものだったこともあり、今回はやや拍子抜けした……というようなご意見もございましたが、今後も、お題の難しい回、単純な回、奇妙な回などなど、あれこれ散りばめて開催していければ、と考えております。どうか、よろしくお付き合いくださいませ。

最後になりますが、今回も、様々に趣向の凝らされた、魅力的な作品をてきすとぼい杯にお寄せくださりまして、誠にありがとうございました！

また、連動企画を開催してくださったちゃんさんにも、この場を借りてお礼申し上げます。

次回てきすとぼい杯は、2013年6月15日(土)開催の予定であります。

お時間ございましたら、またぜひ、投稿、審査・感想にご参加くださいませ。

2013年6月3日
てきすとぼい杯 運営担当

てきすとぽい杯作品集
〈第5回〉

<http://p.booklog.jp/book/72444>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72444>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72444>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



てきすとばい杯